別添様式

平成２２年度地域公共交通活性化研修班別討議内容

Ｄ班

○班別討議において出された意見等

■苦労した点について

※発言者（支局→支・新発田市→新・阿賀野川市→阿・加賀市→加・朝日村→朝）

【新】住民の代表者の生の声を聞いて事業にとりくんできたところ、市として進めたい方向と違っている部分があり、この調整に苦労した。

【阿】運行路１１路線、１３台のバスで運行開始した。自治会からの要望や、運転手からの意見などを基にしたダイヤ改正が困難だった。

【阿】運行の全てを委託しているので、運転手の資質などについての苦情対応が難しい。

【加】交通政策として取組みはじめた当初、黒字だった路線が赤字路線になってしまい、路線存続の危機的な状況となった。

【加】提案は行政から行わないと、住民側からは中々でてこない。アンケート調査の結果だけで運行しても、非常に少ない利用率になってしまう。（回答として「今は利用していないが今後は利用したい」というものは、結局利用しない　など）

【朝】ＪＲ、他の公共交通機関とのダイヤ調整などが困難だった。

【他】運賃は理事者の意向で１００円という前提があった。少しでも利用者を増やす。

■課題点について

・定時定路線で利用者が０人という状況。自治会ごとの要望を調整する方法が課題。

・住民がどうしたいか。料金・ダイヤなどを主体である住民に考えてもらうことで自分達の公共交通という意識を持ってもらう。

・住民主体・協働という方向性はあるが、相応の行政負担がある。

・行政区内のそれぞれの地域で交通体系が違い、温度差がある。

・全戸から協賛金など負担をしてもらうことを考えるのも一つの方法化

・地域（自治体）だけで負担していくことは難しい。

【新】課題を解決しないと運行ができないと思う。山間地でも市街地でも小学校の統廃合が進んでいる。スクールバスを含めた公共交通の仕組にしていくことを考えている。

【支】地域の盛り上がり、活性化が伝わらない事については？

【新】小学校の見直しにあわせて検討委員会を実施しているが、結論がでない。

【支】住民に危機感を持たせることも大切では。

【阿】自分達のバスという意識を持ってもらうことが必要だが、愛着を持ってもらえない。行政が受身ではなく、地域に入って声を聞き、地域でもっているバスということを感じてもらう。

【加】高齢者と高校生の両親しか、説明会等に集まってこない。逆にターゲットとしては絞りやすい。

つまるところ、公共交通は「福祉と教育施策」ではないか。行政の新しい政策課題になっている。各行政の考え方の違いがあるので、統一した政策として、自身をもって財政投入できるようになればいいと思う。

【鈴木課長】（組織の）全体を見渡して、実施していく。巻き込んでいく。

地域交通と観光は分離して考えていく。

【朝】ＪＲのダイヤ改正について、バス事業者だけでなくバス事業を行っている行政にも連絡が入るようにしてほしい。

【他】自治体によって（公共交通施策の）方向性がばらばらで担当課もばらばら

○各班における討議結果
住民意見が多種多様で、全てを汲み上げて調整していくことが難しい。ダイヤ設定についての要望や、他交通機関とのすりあわせなど、調整力が求められている。 マイカー化が進む中で、住民に危機感を持ってもらうことが大切である。 教育･福祉など総合的な施策として行っていかなくてはいけない。